

---

## 怪話篇 第十三話 別れのKiss

K1.M-Waki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怪話篇 第十三話 別れのKiss

### 【コード】

N8785T

### 【作者名】

K1.M.Waki

### 【あらすじ】

恋人に裏切られ殺された彼女。彼女がした最後のKissの意味とは...

1

「ねえ裕美、今度はあっちの方に行ってみようか。」

「そうね……………」

「早くこいよ。ほら、良い景色だよ。」

「……………」

「……………どうしたんだい？今日はいつもと違うなあ。」

「それはあなたも同じでしょう……………淋しい処ね……………。私達の他には誰もいないのかしら。でも……………そうね、その方が都合が良いのでしょうか？あなたには。」

「そ、そうだね。やっぱり邪魔者はいないに越した事はないか。」

「邪魔者ね。そう、邪魔者よ。私、判ってるのよ。」

「判ってるって……………いつたい、何を言い出すん……………」

「私、知ってるの……………あなたが私と結婚なんてしたくない事。」

「……………」

「……………何を。裕美、バカな事を言い出すんじゃないよ。」

「……………」

「いいのよ、皆聞いたんだから。この前、あなたのマンションに行った時、あの人と話してたでしょう。その時は聞こえなかったふりしてたの。だから……………でもいいの。あなたの好きなようになさい。」

「裕美……………」

「良い風ね。このまま逝ってしまうのには勿体ないわね。」

「……………」

「……………何も、言ってくれないのね。それとも……………!」

「……………」

「……やっぱり、……そうだった。」

「そうさ、邪魔なんだよ、おまえは。けど、感謝するぜ。あっさり死んでくれるなんて言うんだからな。いつその事、自殺でもしてくれりゃあ手間が省けるのに。」

「……私、……私、あなたを許すなんて言っていない。」

「そうかい？どっち道、最初から死んでもらう予定だったんだか……！」

「お別れのキスよ。さよなら。……私、あなたを許さない、絶対に……あなたを……愛してたのに……」

「……そうかい？オレは、どうでも良かったんだぜ。」

「……許さ……な……」

「……バイバイ、裕美。」

2

「仁、昨日デカが来たわよ。あの女の死体が見付かったみたいね。」

「そうかい？で、何て言ってやったんだ。」

「さあね。あたしには、関係ない事でしょう。勿論、仁にもね。」

「上出来だ。」

「ねえ、いつ入るの。お・か・ねっ。」

「ん？保健金かあ。まあ、もう暫く待てよ。」

「ふふっ、楽しみねえ。でも、私がバラしたら、あなた即捕まっつてコレね。」

「やめろ！縁起でもない事。」

「どうしたのお、血相変えて。臆病風に吹かれたの？」

「バカ言うな。」

「……変わったわね、仁。あの女の所為？以前のあなたは、死ぬ事なんて人を殺す事くらいに平気だったのにねえ。それが最近は、ちよつと車がかすつたくらいで、冷や汗流したり。その上、死刑が怖いなんて。」

「うるさい。そうだよ！怖いよ、死ぬのも死にそうになるのも……」

・ 確かに変だ、あれ以来な。 . . . まさかな。だが、しかし、 . . . .

「仁、どうしたのよ。しないの、続き。」

「ん？なんとなく乗らなくて . . . . やっぱり行ってくるわ。」

「何処おー？」

「ちよつと病院。」

「病院？まさかエイズの検査だなんて、言わないでしょうね！」

「まさか。あの女に、毒でも盛られたのかも知れん。」

「毒？ . . . ああ、『お別れのキス』ね。」

「そつだ。女の執念は怖いからな。」

「仁！」

「何だ？」

「もし、あなたが死んだら、このマンション貰っていい？あん、保健金もかけておくんだつたわねえ。ねえ、今からでも間に合うかしら？」

「 . . . . 勝手に . . . . しろ。」

3

「仁！ビール飲むうー？」

「いらん！」

「何よ。そんな言い方ないでしょう。」

「悪かったよ。変なのは判ってるんだが、 . . . . あんの藪め、どこも悪くないと吐かしやがる。」

「なら、良いじゃないよ。どこもおかしくないでしょう。ほとぼりが冷めるまで、静かにしてれば直るわよ。」

「ふん、サツなんぞに何が出来る。オレの計画は完璧だ。今までだつて、そつだつたらう。捕まる訳ないさ。 . . . . ん？何だこれは。」

「どうしたの？」

「おまえ、何でこれを捨てたりしたんだ！」

「いいでしょう、あの女の物なんか。目障りでしょう。それとも、惚れてたの?」

「馬鹿やろう。そんなんじゃ……、そうさ、サツにこんな処を見付かってみる。いくら完璧な計画でも、オレもある程度は目を付けられているんだ。疑われて、余計な危険を背負い込むのは御免だからな。……そうさ、だからだよ。」

「どうだか。じゃあ、行くのね。」

「当たり前だ。葬式くらい出ないとな。」

「明後日?」

「ああ。……ちよつと出て来る。」

「何処?病院?」

「ふん!誰があんな藪。何が、『強いて言うなら恋煩いでしょうな』だと。まっぴらだ。」

「じゃあ、何処よ。」

「何処でもいいだろう!……それから、あいつの物には触るな。捨てりしたら、ただじゃあ済まないからな。判ったな!」

4

「課長、ヤツは白ですかねえ。」

「かもしれない、違つかもしれん。」

「しかし、葬式でヤツは泣いてましたよ。ありゃあ、演技じゃないすよ。本気で害者の死を悲しんでましたねえ。」

「その通りだ、新井。だから判らんのだ。白なのか、それとも……愛するが故の殺しなのか。私には、ヤツが4人も殺したとは思えんね。少なくとも、最後の一人は違つだろう。」

「あつ、ここですよ、課長。御免下さい。誰かいませんか?」

「何かな?」

「ああ、松戸京一さんですね?」

「はあ、そうですが。何か?」

「我々、こういふ者ですが……、ちよつとお話が。」

「何の用かは知りませんが、まあ、お入りなさい。こんな処で立ち話も何ですから。」

「他でもありません、以前あなたの助手をなさつておられた河合裕美さんの事について、2・3お伺いしたいのですが。」

「ああ、河合君ね。中々有能な人だったが。彼女がどうかしましたか？」

「はあ、実は、どうも殺されたようで……」

「殺された？ふむ。」

「何か心当たりはありませんか。」

「さあて、……彼女がここを辞めたのは、去年ですからねえ。

それ以降は、先月に一度逢つたきりですよ。」

「先月！先月のいつごろでしょうか。」

「えーと、二十五日くらいですか。突然、訪ねて来ましてね。」

「課長、殺される直前くらいですよ。」

「ああ。で、松戸さん、彼女はその時は何の用で。」

「別に。薬が欲しいと言うので、やったんですよ。」

「薬つて、どんな。」

「失敗作なのでねえ、あまり言いたくないんですがねえ。それに、関係ないと思いますよ。」

「いえ、どんな事でも疑つてかかるのが、仕事ですから。」

「しかしねえ。」

「場合によつては、任意同行でも家宅搜索でもしますよ。」

「仕方ありませんねえ。大したモンじゃあないんですよ。もう現物はないんですが、まあ言つてみればちよつとした『改善薬』ですよ。」

「『改善薬』？……ですか。」

「そう。人間のあらゆる悪しき心を改質して、真人間にして仕舞う薬。」

「……」

「を、造るつもりだったんですがねえ。作用は大した事なくて、代わりに副作用ばかりが強くて。失敗作ですよ。」

「副作用というと？」

「ふむ、なんて言うか、実際に出来たものは所謂『惚れ薬』だったんですよ。まあ、善なる心というものは神への愛とも言えますから、あながち間違ったものが出来た、とも言えんのですがねえ。」

「……は、はあ。」

「それと、死への強い恐怖が残るのですよ。まあ、自殺というものも不道德的な事ですから、間違いではないんですがねえ。」

「……ん、まあ確かに……。」

「……で、彼女はそれを？」

「そうですね。効き始めるのには時間がかかりますが、確実に100%効果がありますからね。60人の男女に使ってみて、60人とも。但し、早くても一週間、遅い者は3ヶ月以上しないと反応が出てこなくてね。」

「……。」

「信用しておりませんな。では、あのN氏の突然の結婚をどう説明します？」

「ええ！あの俳優のNさんが。まさか。」

「使用の際に取り交わした誓約書も、彼の奥さんの感謝状もあるけれど。」

「これは……、本物の様ですね。」

「しかし、こんな物を我々に見せても……。」

「なあに、帰る時に忘れてもらえばいいんですよ。」

「はあ……。で、その薬を貰いに来た彼女に、何かおかしなところはありませんでしたか？」

「別に。好きな男性でも出来たのかって訊いたら、……そういえば、何だか悲しそうに微笑ってましたね。」

「ふむ……。」

「しかし、殺された彼女ですが、使われた人も災難ですねえ。」



「……か、課長、……まさか……」

「……お、恐ろしい話ですね、松戸さん。」

「そりゃあそうですね。後追い自殺も出来ずに、もうこの世に居ない女性に恋焦がれて一生を過ごすんですから。」

「それも、……自分自身で殺したのなら、なおさら……」

e o f .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8785t/>

---

怪話篇 第十三話 別れのKiss

2011年10月9日03時54分発行